

葬送の装いからみる文化比較

Comparison of Clothing Cultures from the View Point of Funeral Procession

増田 美子*¹⁺, 大枝 近子*²⁺, 梅谷 知世*³⁺, 杉本 浄*⁴⁺, 内村 理奈*⁵⁺
Yoshiko Masuda*¹⁺, Chikako Ooeda*²⁺, Tomoyo Umetani*³⁺, Kiyoshi Sugimoto*⁴⁺ and
Rina Uchimura*⁵⁺

*1 学習院女子大学 国際文化交流学部 東京都新宿区戸山 3-20-1

Faculty of Intercultural Studies , Gakushuin Women's College

3-20-1 Toyama, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan

*2 目白大学 社会学部

Faculty of Social Science, Mejiro University

*3 学習院女子大学 国際文化交流学部 非常勤講師

Part-time Lecturer, Faculty of Intercultural Studies , Gakushuin Women's College

*4 東京外国語大学 現代インド研究センター (人間文化研究機構)

Center for the Study of Contemporary India, Tokyo University of Foreign

Studies(National Institutes for the Humanities)

*5 跡見学園女子大学 マネジメント学部

Faculty of Management, Atomi University

+ 服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : The progress of this year's study is as follows. It became clear that the difference among regions is judged by concerning with white as mourning in all the part of the world. White is used in Japan, Turkey and India about a corpse. The color of mourning is white completely in China. The basic color of funeral is white in the Catholic cultural sphere. We would like to aim at how to concern with white in the respective areas and advance the study from now on.

*1) yoshiko.masuda@gakushuin.ac.jp

はじめに

本研究は、最も保守的な儀礼として各国の伝統文化を伝えている可能性が高い葬送儀礼の装いを調査し、仏教文化・ヒンドゥー教文化・イスラーム教文化・キリスト教文化の各宗教文化圏間の共通点および相違点を明らかにすることを目的としたものである。22年度は、21年度に引き続き、それぞれの研究対象の国や文化圏における近現代の葬送儀礼の実態を把握することに努めた。

研究方法

増田は中国の葬礼について、中国における研究書等の文献収集及びその解読により全体的傾向の把握及び具体的事例の収集に努め、大枝は「コーラン」及び「ハディース」からイスラームの死生観を考察の上、具体的事例としてトルコにおける死生観を探ることに努めた。梅谷は「明治期における黒喪服の導入と浸透」をテーマに明治期の国葬等に関する資料を、国立国会図書館憲政資料室・国立公文書館・宮内庁書陵部等で収集し、服装規定を中心に検討した。杉本は昨年度に引き続き2010年12月17日から2011年1月9日まで東部インド・オリッサ州の旧都カタック市に赴き、「ヒンドゥー教徒の葬送儀礼とその装いの文化」をテーマに現地調査及び現地語であるオリヤ語で書かれた葬送儀礼に関する典範書の解読に努めた。内村は昨年度収集したAFP通信のデータベース及びパリのフランス国立図書館で収集した文献解読に努めるとともに、2010年8月26日から9月6日までパリのフランス国立図書館、モードと織物美術館図書室に赴き、昨年収集できなかった図像資料の収集に努めた。

またこれら個別の研究と平行して、数度の研究会を開き、各自の研究の進捗状況と研究成果の報告・討議を重ねるとともに、2011年1月28日から2月4日の間、杉本の現地における調査協力者であるオリッサ州 Ravenshaw University 教授の Chandi Prasad Nanda 博士を招聘し、2月3日の研究会では Nanda 教授に”Exploring *Antyasthi*: Stages of Death Rituals in Hindu Tradition” (葬儀の検討：ヒンドゥー伝統における死の儀礼の局面)のテーマで報告をしていただいた。

研究成果

近代日本の葬送の装いにおける黒の導入は、国葬及び国葬に準じた公的な葬儀に参列する人々の礼服（大礼服・通常礼服）や制服から始まった。明治期の最初の公的な葬儀であった大久保利通の葬儀（明治11年）の際に、皇族以下の会葬者に大礼服着用と黒の腕章・帽章・襟飾り・手袋を着けることが定められたが、これらの規定はロシア・イタリアの国葬を参考にしたようである。明治12年には陸海軍の軍人に対して「陸軍会葬式」「海軍会葬式」が公布され、帯勲者の

葬儀に参列する場合には正装に黒腕章をつけ、軍旗の上に黒紗をつけることが定められた。庶民に関しては、明治30年1月に崩御した英照皇太后の大喪の際に、庶民喪服心得が出されて、和服の左肩に黒布をつけることとされ、一般庶民も黒喪章をつけて哀悼の意を表すものが多くなった。黒が喪の色であるという認識が庶民にも広まった大きなきっかけとしては、明治27年8月に始まった日清戦争が考えられる。戦時中の新聞には戦死者の盛大な葬儀の様子を伝える記事が頻繁に見られ、葬儀に参列した多くの警察官や軍人の黒喪章が当時の人々に喪の色としての黒を強く印象付けたと思われる。

中国においては、予め死後の衣服（寿衣又は老衣）や装飾品を作っておくのが一般的な習慣である。清朝末期の都では、寿衣は社会的地位で決まっていたが、中華民国になってからはそれが無くなった。寿衣は単が普通であるが、袷や綿入れの時もあり、素材は綿又は絹で毛皮は用いない。皮を着せて埋葬すると、来世で獣類に脱変すると信じられている。寿衣は重ね着がなされるが、その枚数はいずれの地域でも奇数と決まっており、ボタンは用いない。ボタンの中国語である「紐子」は「ねじれる」の意味の音と通じるからである。男性の寿衣は黒や青系統が多いが女性は紅色など華やかな色に刺繍をしたものなどが用いられる。そして臨終近くになると、新しい衣服を着せ、オンドルやベッドから特設の簡易ベッドへ移さなければならない。亡くなると、身体をきれいに拭いて用意しておいた寿衣を着せ、口に真珠や玉を含ませて顔や身体に白い布を被せる。葬式は「白事」と言われるように屋敷全体が白に装束され、遺族の喪服も白麻布又は目の粗い白綿布製で、麻紐の帯を締め、頭に白喪帽を被る。しかし現在は火葬が普及し、都会では地味な服に黒喪章をつけるパターンが多くなっている。

イスラームでは、魂は皆死を体験しなければならず、各人の死ぬ時期は予めアッラーにより正確に定められており、死の後に復活し永遠の生命が与えられるという考え方から、葬儀は迅速かつ簡素である。遺体は湯灌され、2〜3枚の白い綿布で包まれ、遅くとも翌日までには埋葬される。葬儀に参列する人々の服装に決まりもないが、暗い色を着用する人が多い。イスラーム教徒が99%を占めるトルコでも、遺体は白い布で包まれて埋葬され、参列者の喪服の決まりもない。20世紀初頭に至るまでアジアからヨーロッパにまたがる大帝国を築き上げたオスマン帝国でのスルタンの葬儀の姿を、当時の細密画から考察すると、参列のための明確な喪服はなく、男性は黒やダークブルー、ブルー、紫、灰色、緑などの暗い色の衣服を着、女性のもはカラフルな色彩である。ターバンだけは黒色で表現されているものもある。棺にはターバンが置かれ、スルタンの名誉や地位を象徴している。このようにオスマン帝国においては被り物が服装以上に富や権威の象徴であり、葬送儀礼におけるその重要性が窺えた。

ヨーロッパにおける喪についてカトリックの典礼書を史料として分析した結果、死は新たな生命を獲得するための過ぎ越しの性質を帯びているため、「復活」を意味する「白」が葬儀の基本色となっている。しかし、地方などの慣例も重んじるため、黒を用いることも認めている。教皇

の葬儀において、赤色が顕著にみられるのは、葬礼を取り仕切る枢機卿の色であるからだろう。17世紀から18世紀にかけてのフランスでは、喪服のエチケットは複雑を極めており、18世紀になると年譜の形をとって書店で葬礼のエチケットが販売された。フランス国立図書館が所蔵する1766年の喪服に関する年譜 (*Ordre chronologique des Deuils de Cour,...* Paris, De l'Imprimerie de Moreau, 1766)によれば、喪服は、大喪服(*grand deuil*)、小喪服(*petit deuil*)あるいは半喪服(*demi deuil*)と区分され、死者の位と死者と服喪者の関係によって、服喪期間および喪服の種類が厳密に規定された。大喪服は父母・祖父母・夫・妻・兄弟姉妹にのみ適用され、3つの時期に分かれる。毛織物の時期に始まり、次に絹と黒石の装飾品の時期、さらに小喪服および短い服 (*habit coupé*)とダイヤモンドの時期とである。小喪服は黒から始まり、忌明けが近づくにつれ白色に移行していく。近世フランスでは弔意を表す際、色とともに素材も重視されていたことが窺える。

ヒンドゥー教では16の人生儀礼があるとされるが、葬送はその最後の重要な儀式である。カタック市の葬送では、死の直前の儀礼(*chandrayana*)に始まり、死後直ちに行われる火葬儀礼を経て、さらに11日間に亘って様々な儀礼 (*Puraka Karma*) が執り行われる。こうした儀礼の間に、死者は亡骸を離れて、南方にあるヤマ王が住まう死者の国へと旅立つ。一連の儀礼は死者の靈魂が安定した祖霊に転化して旅立つために行われるが、死の穢れによる危険な状態にある遺族を守るための儀礼も含まれる。通例、死者は白い布を身にまとい茶毘に付されるが、夫よりも先に死去した妻については、吉兆の色である赤のサリーを身につけ、髪分け目にはシンドゥール(辰砂)が塗られ、腕輪がはめられる。これは妻としての責務を全うしたことを祝福する意味がある。火葬後の10日間は死者の家族は死の穢れによって危険な状態にある。その危険から身を守るため、沐浴やひげ剃りなどを禁ずるといった規制がなされると同時に、喪主を中心とする数々の儀礼が家中で毎日執り行われる。その一方で、火葬後4日目行われる拾骨式(*Asthi Sanchayana*)から10日目まで、川岸に建てた小さな死者の家で故人のための儀礼が行われる。10日目の儀礼の後に遺族は沐浴をし、儀礼場を片付けて浄め、死者への儀礼の後、新しい服に着替える。同夜に開かれる公の葬礼の参加者たちに決まった喪服はなく、多くの場合普段着である。

昨年の研究で、仏教文化圏の日本、仏教・儒教・道教の混在した中国・台湾、インドのヒンドゥー教文化圏およびヨーロッパのカトリック文化圏においては、いずれも死と関わる基本的な色は白であったことがわかったが、今年度の各自の詳細な研究により、その具体的な姿が明らかとなった。フランスにおいては、18世紀には黒が喪服の色として定着しており、忌明けが近づくに連れてその色も白に近づいていく。日本においては、従来の白を基調とした喪服に対して、欧米化の波の中で政府からの音頭とりによって黒を喪の色とする意識が次第に人々に浸透して行くが、死装束は基本的に白である。中国では葬式そのものが「白事」と言われるように、喪の装いの色として白を貫き通しているが、近年は都市部ではこの風習からも脱却しつつあるようである。ただ死装束に関しては白ではなく、女性は紅等に刺繍した華やかなものもある。トルコでは

遺体は白布で包むが、喪服には決まりが無く、女性はカラフルな衣裳を身につけていることが多い。また、インドのヒンドゥー教でも男性と未亡人が死亡した場合は、白い布を身にまとして茶毘にふされるが、妻が先だった場合の死装束は赤色のサリーである。

以上のように、今年度の研究からはそれぞれの地域において喪と白色の関わりは欠かすことが出来ないが、その関わり方は、日本やトルコ、インドのように遺体と関わったものである地域と中国のように喪と関わるものは全て白という地域、そしてカソリック文化圏のように白が儀礼の基本色となっている地域というように地域差がみられる。今後は、これらの白との関わり方の地域差に着目して研究を進めることが、文化比較の研究において重要なポイントになるであろうことが明らかとなった。